



だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第52号

2022年2月23日(水)

思い新たに

「今市の水を守る市民の会」が誕生して22年が経ちます。この間、誰もが想像できなかった東日本大震災が発生、そして今またコロナウイルス蔓延により私達の日常も変化してきています。日光連山が生み出す水が今市扇状地を成し、そして潤されたこの地に私達の暮らしが営まれていることは今後も変わらず続いていくでしょう。この機会に会の歩みを振り返ることにします。

「今市の水を考える会」の後継として、引き続き福田健彦代表のもとに多数の人が結集し「今市の水を守る市民の会」として設立されたのが平成12年(2000年)4月のことでした。記念すべき「だいや川通信」創刊号は同年6月21日に発行されています。当時、旧今市市および市民には生活に大きく関わる水問題が浮上してきており、そこに対処する緊急行動が市を挙げて各所で繰り広げられていました。それは、今市市内を流れる大谷川から水を取水して地下導水管を通して行川にダムを造り、更にその水を遠方の南摩地区に送水するという、国の思川開発事業計画(南摩ダム)への抗議・反対活動でした。そこで、当会では市役所OBの福田代表の豊かな知識と経験を基に新メンバーでの活動が始まったのです。多くの団体や人々による反対活動は当時の福田昭夫市長を栃木県知事に選出する結果となり、2000年秋、福田知事によって正式に大谷川取水は中止となりました。懸念する課題が解決された後は、今市地震や南摩ダム関連を研究目的とする「専門部会」と、足許の水環境を広く知るための「普及部会」とを立ち上げ、それぞれ活動をしてきました。しかし残念ながら平成21年(2009年)2月に福田代表が逝去され、以降は新体制一代表:塚崎庸子、副代表:毛塚博子、事務局長:森道暁、通信編集:手塚郁夫、会計:須佐佳子にて活動を続けています。

現在は旧今市市内を流れる川や周辺の森、そして里山の暮らしに焦点を絞り、子供を対象とした「川むし探検」、大人向けには「ゆったりウォーク」を年二回ずつ実施していますが、それぞれの活動を通して今市はと

ても面白い所だと毎回強く感じるようになりました。川の中にはカワゲラ、プラナリア、ヘビトンボなどきれいな水に棲むさまざまな生き物たちが元気に暮らしていますし、周辺の森・山は時代の変化を受けながらも今なお水を生み出してくれています。

「ゆったりウォーク」はあえて観光地を避け、長年培われてきた人々の暮らしを身近で追体験できるよう、各回おおよそ5^{km}の歩くコースを設定しています。見事な眺望、静かに歴史を伝えてくれる立派な建造物。そして現地での思いもかけぬ方との遭遇は、人と人とのふれ合いの大切さ・楽しさと呼び覚ましてくれそうです。参加者からの感想は次回への励みになっていきました。

22年間の諸活動を振り返ると、山や川への先導を率先して引き受けて下さった隅秀一さん・中島守さん、行政の知識を与えて下さった福田健彦代表・元市議会議員長吉原徳さん。4人の方(共に故人)のお力に負うものが大きかったことを深く思います。

北京オリンピック開催中であっても緊張を強いる国際情勢が続いている現在、私達の生活にも影響が及ぶかもしれません。身近なところでは、戦後植林された杉・檜が伐採の時期を迎え、それを積み込んだトラックを毎日目にするようになりました。水を生み出すのは木々、林、森、山です。この地がソーラーパネルで被われないことを祈ります。

自然環境の厳しい地だからこそ乗り越えてきたこの地の暮らしがあります。便利になりすぎてしまった私達の日々を見つめ直し、水と緑の豊かさから得られるものを探して今年も活動していく所存です。引き続きのお力添えを今後ともよろしく願います。

(塚崎庸子)

目次:

思い新たに	1
新型コロナワクチン	2
秋のゆったりウォーク 長畑・分水嶺を歩く	3
大貫林治さんを悼む	4



定例会のお知らせ

毎月・第4金曜日

午後1時~2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローシートキャンペーン」日です。半年に一度、シート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにシートを入れてくださるようご協力お願いします。当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

長畑・岩鼻山からの眺望
ゆったりウォーク(3ページ)



新型コロナ・ワクチン

3回目以降の反復接種が特に危険な理由

本稿は、筆者の個人的調査に基づく報告であり、
当会としての見解ではないことをお断りいたしておきます。

昨年10月ごろ、筆者は元ファイザー社副社長で研究開発担当の最高責任者であった、マイケル・イードン博士という人が、動画サイトで「このワクチンを打つと2年以内、遅くとも3年で死ぬことになる。」との内部告発をしていることを知り、すっかり驚いてしまった(高橋徳・他著①)。以下、現時点でワクチンについて明らかになりつつある危険性を4点にわたって検討して、イードン博士の発言の真意を探ってみたい。参考にさせていただければ幸いである。

【1】「治験」が終わっていないワクチンの「接種」は、 文字通りの「人体実験」となること

今回のmRNAワクチンは、20年近く前からSARSやMERS、C型肝炎、エボラ、エイズなどで開発が進められてきたが、いずれもADE(後述)が起きることで許可されることなく開発は中止されてきている。治験も済んでいないmRNAワクチンが人間に「接種」されるのは、今回が初めて。

「治験中」であれば、重篤な副作用や死亡事故が起きた場合は製薬会社の責任が問われることになるのでワクチンの開発は一時中止となるのだが、今回は「特例承認済み」をいいことに日本政府はワクチンによる死亡を正式には一件も認めていない。だが、昨年の厚生労働省第4回医薬品等行政評価・監視委員会において、委員長代理の佐藤嗣道教授(東京理科大学薬学部)は、人口動態統計速報によるデータを詳細に分析して、その時点までのワクチンによる死亡者数を約2万人との見解を示したという(小川・他著②)。これは月別の超過死亡率とワクチン接種者の年齢別構成などを加味した分析によるもの。ちなみに超過死亡率は、インフルエンザ等の感染症の死者数を把握するために、使用されている手法とのこと。いずれにせよ、このワクチンによる薬害の実態は、日本国内だけで死者数万人という史上空前の規模になっている可能性が高い。

【2】ワクチンが人体内で産出するスパイクタンパク そのものが、血栓を作る毒であること

今回のファイザー社のワクチンは、これまでのワクチンの作り方とは全く異なる、いわゆる「遺伝子ワクチン」である。これは病原体を構成するタンパク質の設計図(遺伝子)である、mRNAを体内に投与することで、それに対する抗体を作り出す仕組みになっている。従って接種者の体内で新型コロナウイルスとほとんど同じスパイクタンパクが作られ続けることになる。その期間は抗体を作るために、できるだけ長期間、体内に留まるよう工夫されている。

ところが昨年、米国のソーク研究所など多くの権威ある研究者たちによって、このスパイクタンパクそのものが、血栓を作り出す毒であることが明らかになった。もともと新型コロナウイルス感染症は、ウイルスのスパイクタンパクが体内のACE2受容体を介して血栓を作り出すことによって起こされる。つまりスパイクタンパクとは新型コロナの病原体そのもの。従ってワクチンの中に病原体が入っており、そ

れが長期にわたって体内に産出される仕組みになっている、ということになる。これはもはや「病原体産出薬品(?)」でしかない。

井上正康氏(大阪市立大学名誉教授・分子病態学)によると、スパイクタンパクが体内にとどまる期間は、ネズミなどの動物実験では約1カ月。人に換算すると10カ月以上で、さらに少なく見積もってもイードン博士の言う2~3年は充分、産出され続けていることになる。これだけ人体内で長期にわたって血栓が作られ続けているとすれば、ワクチン接種が3回目を大幅に超える時期になっても、スパイクタンパクは増え続ける。従って様々な血栓症にかかり死に至る確率は飛躍的に増大することになる。

【3】反復接種はADE(抗体依存性感染増強)を 引き起こすこと

井上氏によると、ワクチンを打つと”良い抗体“(中和抗体)と”悪い抗体“(感染増強抗体)ができる。前者はコロナウイルスを排除する抗体だが、後者は逆にウイルスを増強しやすくする抗体で、その両方ができる。ワクチンを打って前者が後者を上回れば、そのワクチンは感染や重症化を防ぐが、逆になれば感染も重症化もしやすくしてしまう。

ご承知のように、現在のワクチンは変異株にはほとんど効かなくなっている。これはワクチンで誘導される中和抗体の効果がなくなり、その一方で感染増強抗体は相変わらず産出され続けるので必然的に勢力が逆転することになり、それが高じるとADEに至る。既にファイザー社のmRNAワクチンを3回接種したイスラエルやシンガポールなどでは、大きな感染爆発が起こっており、ワクチンによるADEの可能性が懸念されている、という(井上・他著③)。

【4】反復接種は自然免疫力の極端な弱体化を招くこと

2008年、ノーベル医学・生理学賞を受賞したフランスのリュック・モンタニエール博士や、ビル&メリンダ財団でワクチンの開発責任者を務めたボッシュ博士らは、ワクチンの接種回数が増えると抗体が低下し、人が生来持っているはずの自然免疫力が破壊されるため、通常の風邪やインフルエンザなどでも死亡するエイズのようにになると警鐘を鳴らしている。

この件については、国際ジャーナリストの田中宇(さかい)氏が自らのブログで、欧州医薬品局(EMA)は(本年)1月12日に、「コロナ・ワクチンの追加接種を4カ月ごととかの高頻度で繰り返すと、生来の自然免疫システムを壊してしまい免疫が下がって逆効果になるのでやめたほうがよい。追加接種を繰り返すなら、もっと間隔をあけるべきだ。」との警鐘を発したとのこと(田中宇④22年1月10日号)。

イードン博士の衝撃的発言に戻ると「3回目以上の反復接種を続ければ」との条件を付ければ、見事に現状を予測していたのではなからうか。(丁・文責 森)

参考図書

- ① 高橋徳・他著「コロナワクチンの恐ろしさ」(成甲書房刊)
- ② 小川正樹・大橋正俊著「治験はまだ終わっていない」(至誠堂塾出版刊)
- ③ 井上正康・他著「新型コロナの騒動の正しい終わらせ方」(方丈社刊)
- ④ ブログ「田中宇の国際ニュース解説」

ゆったりウォーク 分水嶺を歩く

2021. 10. 23 長畑編 (PartII)

長畑は当市西部にそびえる鶏鳴山の麓、西沢川と東沢川の合流する地にあります。近年、定着してきた「蕎麦の街日光」、その草分けのお店はこの長畑から誕生しました。県道70号線をはさんで市立落合西小学校と曹洞宗普門寺があり、そのお寺の奥にそそり立つ山が「岩鼻山」です。頂上から北に続く尾根は長畑と明神の分水嶺、東に下ると行川に、西に下ると長畑川(西沢川と東沢川の合流)になります。

10月23日(土)晴れ。参加者15名で岩鼻山に登ってきました。県道から直ぐに入れる登り口があり、厳しい斜面を登りきると眺望の素晴らしい頂上に立っています。刈入れの終わった田んぼと一部収穫前の蕎麦畑が織り成す光景はこの季節の持つ充実感と懐かしさを湧き上がらせ、参加者皆さんからあがった歓声はスタッフの感激につながりました。長畑や明神地区は昔、モリブデンという鉱石を産する場所が数ヶ所あったそうです。頂上付近に掘られた穴は試掘用だったそうですが、他の採掘場所もすっかり埋められ、高度成長を目指した時代の証人は今、静かな眠りについていきます。

起伏ある小さな尾根筋を進んで下ると、明神方向からの林道と合流。そこで水溜りを発見しました。どうやら山の生き物達の沼田場(ぬたば)になっているようで、毛を拾い上げた参加者によると毛は鹿のものと。断面でカモシカと区別できるそうです。下見の折に聞いた鹿の声も皆さんに伝えたら、別の人が百人一首の「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」を披露してくれ、古の時間を共有させてもらいました。センプリとアケボノソウの咲き残る山道を辿り、東沢の大宮神社に到着。樹齢600年を超える「太郎杉」を仰いだ後、帰路の県道に。途中、蕎麦を脱穀中の地元の方達と会い、作業を見せてもらったのは幸運でした。



一人では体験できないことを参加者から、また地元の方からその知識や経験を教えていただけるのは「ゆったりウォーク」ならではの醍醐味です。前回の手岡に続き、今回もその思いを強く持ちました。コロナ禍ではありますが、久しぶりに出会った知人達との会話、めぐりの木々や草花の香りを受け、葉ずれの音を聞く。そして何より参加者同士の体温を感じながらのウォークは、バーチャルでは絶対体験できないことです。最初の登りは結構きつかったのですが、支障なくウォークできたのは、下見にてコース全般を案内くださり、駐車場を提供してくださった地元の福田耕一郎さんのご厚意によるものです。改めてここにお礼申し上げます。

「里山の暮し再発見」。春のウォークを計画中です。ご期待ください。(塚崎)

山ふところの蕎麦の里

まず岩鼻山に登り「今市手打ちそばの会」発祥の地“長畑”を「これぞ日本の風景だな～」と高みから眺め進む。コースの終盤、道の両側にはそば畑が広がっていた。と・・・作業車が動いている。よくよく見ると蕎麦の実の収穫中(初めて見た!)。コンバインで刈り取りすぐ実だけを分別して袋に



入れるという効率的な作業。しばらく見とれてからまた歩き出すと、ある建物で先行メンバーの人ばかり。ゆったりウォークの醍醐味でふらりと寄り道をしている。そこは脱穀施設で、コンバインで収穫した蕎麦の実の袋が集められていた。幸運にも地元の蕎麦の会の方々が脱穀の最中で、蕎麦のお話をいろいろ聞くことができた。この蕎麦は「長畑庵」の他、宇都宮市のお店1店舗にしか供給していないそうだ。

この一連の蕎麦づくりを見てから味わう蕎麦は特別な味になるだろう(まだ実現していない)。つくづく、この風景がずっと続いていってほしいと思った。(毛塚博子)

次ページに続きます →



10月 1日 (金) 定例会
10月23日 (土) ゆったりウォーク
11月26日 (金) 定例会
1月28日 (金) 定例会

ゆったりウォーク 分水嶺を歩く 写真集



登山口
さあ、
これから
岩鼻山に
登ります！

山頂付近

モリブデン鉱採掘跡を左の崖下に眺めることができました。顔を出している岩石の破片を拾い、詳しい人に見せたら「チャートです」と...こんなところに堆積岩が！



尾根を北に向かって歩く 長畑・明神の分水嶺をゆっくり歩きました。東に下ると行川、西に下ると長畑川。



沼田場(ぬたば)
軍手の指先に付いている針のようなもの。水溜り周辺で見つけました。「鹿の毛」だそうです。

郵便振替口座 00140-4-535550
〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183 (8時～17時:森)
0288-26-3324 (17時～21時:塚崎)
<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

おぬきしげはる

大貫林治さんを悼む

鹿沼市草久にお住まいの大貫林治さんが2月9日、ご病気のため逝去されました。74歳でした。大貫さんは鹿沼市北部を流れる東大芦川の清流を生涯かけて守ってこられた方です。国の思川開発事業計画(南摩ダム)に付随して昭和48年(1973年)、栃木県が東大芦川にダム計画を打ち出して以来、一貫して建設反対を唱え、集落の人達が去っていった後もご一家はこの地に留まり、数多くの活動を起こしてその意志を強く表わしてこられました。大貫さんと奥様の身を削ってのその行動は多くの人の共鳴共感を呼び、私達「今市の水を守る市民の会」も支援の一環として、川の流れのご別荘をお借りし演奏会をさせていただいたことがありました。平成15年(2003年)、東大芦川ダム計画は正式に中止されました。東大芦川は周辺の山から生まれ出る水をすべて集めて流れていきます。透視度・水質共に県内随一を誇ります。この川をこれからも長く見守っていただければと思っておりましたのに、このような早いお旅立ちには誠に残念でなりません。そのご遺志を私達は決して忘れることなく、前を向いて進んでいきます。大貫さん、これからもこの川での子供達の水遊びや川虫たんけんをさせて下さい。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(塚崎庸子)

この清流が守られた！
(2002年2月 白井平にて)



編集後記

東日本大震災から11年が過ぎようとしています。地震と津波で原子炉が壊れ、環境に出てしまった放射能が大気の流れに乗って、この日光にも飛来し地上を汚染しました■放射能は時間とともに放射線を出しながら減少していきます。もとの量が半分に減るまでの時間を「半減期」といい、種類によって長短があります。セシウム134、セシウム137の半減期はそれぞれ2年、30年です。11年後の今、これらの汚染物質は、約3% および 78% が残っていることとなります■ネットには「もともと自然には宇宙線などの放射線や自然放射能がある。日本では1年に約2.4ミリシーベルト被ばくしている」という放射能についての説明が見つかりますが、自然からの被ばくに加えて、放射性セシウムによる「追加の被ばく」を慢性的に受けてしまっていることを忘れてはなりません■半減期の比較的短いセシウム134はだいぶ減少してきました。いっぽうで半減期30年のセシウム137は当分の間地表に残り、ガンマ線を出し続けます。日光市大沢の草地、地表から深さ5cmまでの土壤に含まれる放射性セシウムを2014年より毎年測定してきました。乾燥土壌のセシウム137濃度は1キログラムあたり約1000ベクレルで、ここ4、5年変化がありません。どうやら放射性セシウムは土壤の成分と結合し地表に居座っているようです■森林や草地では水の流れとともに放射能は移動し、場所による放射能濃度の高低ができます。食物への汚染も油断できません。土壤の放射能濃度と空間線量を継続し、監視し続けることは、子どもたちを守り、原発事故の記録を後世に残すために、22世紀まで続けなければならない重要な仕事ではと思います。(T)